



# ～秋 東紀州イベント情報



	開催日	イベント	問い合わせ先	問い合わせ先☎
紀宝町	H. 21. 10. 16(金)	御船祭(熊野川河口)	熊野速玉大社	0735-22-2533
	H. 21. 10. 18(日)	紀宝みなとフェスティバル	紀宝みなとフェスティバル実行委員会	0735-33-0334

	開催日	イベント	問い合わせ先	問い合わせ先☎
御浜町	H. 21. 11. 8(日)	御浜みかん祭り	御浜町役場産業建設課	05979-3-0517

	開催日	イベント	問い合わせ先	問い合わせ先☎
熊野市	H. 21. 10. 2(金)	花の窟秋季大祭お綱かけ神事	熊野市役所観光スポーツ交流課	0597-89-4111
	H. 21. 10. 11(日)	木本まつり	熊野市役所観光スポーツ交流課	0597-89-4111
	H. 21. 11. 3(火)祝	紀和のふるさとまつり	熊野市役所紀和総合支所地域振興課	0597-97-1113
	H. 21. 11. 3(火)祝	二木島祭	熊野市役所観光スポーツ交流課	0597-89-4111
	H. 21. 11. 23(月)祝	大森神社どぶろく祭り	熊野市役所観光スポーツ交流課	0597-89-4111
	H. 21. 11. 29(日)	かやの木祭り	熊野市役所観光スポーツ交流課	0597-89-4111

	開催日	イベント	問い合わせ先	問い合わせ先☎
尾鷲市	H. 21. 10. 24(土)~25(日)	第7回熊野古道祭り	熊野古道まつり実行委員会	0597-23-8261
	H. 21. 11. 7(土) ~8(日)	全国尾鷲節コンクール	尾鷲市役所新産業創造課	0597-23-8223
	H. 21. 12. 5(土) ~19(土)	尾鷲イタダキ市	実行委員会事務局(尾鷲商工会議所内)	0597-22-2611
	H. 21. 11. 21(土)~22(日)	第6回おわせ海・山ツーデイウォーク	おわせ海・山ツーデイウォーク実行委員会	0597-23-8221

	開催日	イベント	問い合わせ先	問い合わせ先☎
紀北町	H. 21. 10. 11(日)	かます祭り	紀北町観光協会	0597-46-3555
	H. 21. 10. 18(日)	引本浦関船祭	紀北町観光協会	0597-46-3555
	H. 21. 11. 7(土)	世界遺産登録5周年記念ツヅラト峠もみじまつり	紀北町役場 産業振興課	0597-32-3905
	H. 21. 12. 19(土)~28(月)	年末・きいながしま港市	紀北町役場 産業振興課	0597-32-3905

	開催日	イベント	問い合わせ先	問い合わせ先☎
その他	H. 21. 10. 17(土)~18(日)	「ようこそ熊野古道・伊勢路へ！！」 ～語り部と歩いてみませんか～	東紀州観光まちづくり公社	0597-23-3434 0597-89-6172
	H. 21. 11. 22(日)	みえ熊野学フォーラム	みえ熊野学研究会 東紀州観光まちづくり公社	0597-23-3434 0597-89-6172
	実施中~H. 22. 1. 31(日)	南三重スタンプラリー	東紀州観光まちづくり公社	0597-23-3434 0597-89-6172
	H. 21. 10. 1(日)~11. 30(月)	第3回みえ熊野の情景スケッチコンテスト	東紀州観光まちづくり公社	0597-23-3434 0597-89-6172

## 文学碑のある風景

### 井上靖の文学碑

熊野市久生屋町 中田重顕

このほど、名勝鬼ヶ城の千畳敷の入り口に、井上靖の文学碑が建立された。鬼ヶ城は、自然が折出した奇岩が連続する岬で、かつて、身丈七尺の多蛾丸という鬼が棲んでいたという伝説がある。このような井上の詩文

昔熊野の鬼たちはここに集まり棲だ。彼等は風に髪を飛ばし渦を啖い夜はよもすがら岩を揺すぶる波濤の音の中に眠た。月明の夜より雷鳴の夜を好んだ。二本の角は稲妻の中で生き生きとした。



井上靖の文学碑

井上は、1950年、小説「鬪牛」で芥川賞を獲得して大作家への道を歩み始めるのだが、彼は元々毎日新聞大阪本社の記者で、同僚に熊野市木本町出身の竹本辰夫がいた。その縁で、何度も熊野に来ている。まだ、紀勢西線と呼ばれて紀伊木本駅が終点だった頃のことである。

今は瀟洒な特急電車が走る紀勢線も当時は、天王寺から十時間もかかる蒸気機関車で、しかも激しく混み合っ立ち詰めのこと多かつた。井上は作家になる以前から、竹本辰夫を尋ねて夜汽車の苦しい旅を続けて来たのである。親友竹本辰夫の娘が「井上さんは鬼ヶ城が好きでしたねえ」と語っているように、井上の作品の中に鬼ヶ城はしばしば登場する。もっとも知られているのは散文詩、「渦」であろう。静かな初冬の日、藍青一色に凩いだ南紀の海はその一角だけが荒れ騒いでいた。波浪は鬼ヶ城と呼ばれるその岬の巨大な岩壁を咬み、底根しらぬ岩礁のはざまはざまに、幾つかの大きい渦をつくっていた。むかし鬼が棲んでいたと伝えられる広い岩の上に立って、私は刻の過ぎるのも忘れて、ただ刻まれては崩されている渦紋の孤独傲岸なマスクに心うばわれていた…

散文詩「渦」の一節である。この文学碑の前に佇み、「私はよく、夜更けの冷たいベッドの中で、そこ遠い熊野

### 梶井基次郎の文学碑

紀北町海山区上里。ここの町立上里小学校の校庭に、一基の文学碑が立っている。昭和7年、31才で結核により夭折した、梶井基次郎の碑である。

梶井は、「檸檬」「城のある町にて」などの瑞々しい作品を残している青春の作家である。彼の文学を知らなくても、「桜の樹の下には屍体が埋まっている！」の文言は誰もが口にするであろう。繊細な神経の梶井ならではの文章なのだ。

代表作「城のある町にて」は松阪が舞台である。彼の姉が三重県で教員をしていて、結核の療養も兼ね、梶井は姉の家に寄宿していた。姉夫婦は北牟婁でも教員をしていて、梶井は上里に住んだこともあるのだ。

この小説の中の文章をそのまま文学碑に刻んでいる。清楚な上里小学校の校庭と梶井の文章はよく似合う。しかし、芋は百姓の…の部分には地元の人たちから事実と違うとの声があがったという。もちろん、上里はそんな

そこは山の中の寒村で村は百姓と木樵で養蚕などもしていた。冬になると家の近くまで猪が芋を掘りに来たりする。芋は百姓の半分の常食になっていた。



梶井基次郎の文学碑

# 三浦樗良(ちよら)の文学碑

樗良は享保14年(1729)生まれ。出生地については、志摩鳥羽、紀伊長島の両説がある。われわれ熊野の者としてはもちろん紀伊長島説をとりたい。宝暦9年(1759)、伊勢山田を發し紀州熊野木本に遊ぶ。出水のため川を渡ることができず、地元の人々の好意で新鹿に留まり、岐川庵(ふたまたあん)と称して庵を結ぶ。木本、新鹿、二木島の俳人と交流が始まり、やがてその俳友たちと処女撰集「白頭鴉」を刊行。宝暦11年(1761)、新鹿に再び来て、岐川庵に滞留。句集「ふたまた川」成る。このまま俳人たちの世話で新鹿で越年。樗良はどうやら恋多き詩人だったらしく、隣町二木島の遊郭に働くかよい女と愛し合って夫婦になる。かよい女も賢い女性だったらしく、次の佳句を残している。新鹿海岸の三浦樗良の句碑の横には、地元の英語教師が建立したまこと開明の新鹿らしい英文の句碑もある。新鹿の白い帯を惹いたような美しい渚を見ながら、この地に庵

こえなしに匂ひて咲くやむめの花

消えもせむ有明月の浜千鳥 樗良



## 折口信夫の歌碑

JR紀勢本線船津駅から、徒歩で約10分、国道42号線中里バス停より(徒歩約2分)一本入った町道沿いに海山町郷土資料館がある。この建物は90年以上の歳月を経た洋風建築で、昭和55年3月1日に「海山町郷土資料館」として発足。その資料館前の庭園の池のそばに、折口信夫の歌碑が建てられている。

大日本百科事典(小学館)によると、折口(おりくち)信夫(しのぶ)は、(1887~1953)古典学者・民俗学者・歌人・詩人。研究論文には本名を用い、詩歌・小説その他の創作、歌論・劇評などには、別名、釈迢空(しゃくしょうくう)を用いた。大阪府西成郡木津村(現大阪市)に生まれる。代々岡本屋と称して生薬と雑貨を売り、医を本業とした。祖父造酒介は大和飛鳥座神社の神主で、事代主命の裔という飛鳥直の家から出た。1910年(明治43年)国学院大学卒業。(後略)と記れて入る。折口信夫は、大学卒業後、大阪に帰り中学校の教員となり、やめてから再び上京。民俗学者の柳田国男と出会い、柳田の知遇を得て、終生、師としながら「折口」独自の学問の世界を築くことになる。

大正元年8月、中学校の教員をしていた折口信夫は、学生2人を連れて海山町を訪れる。海山町引本につき、船津を経て中里に至り、往古川を溯って大台ヶ原への登山をめざしたのであるが花抜峠付近であろうか、それとも、その奥山の辺りであろうか、道にまよい、山中をさまよって、やっと引本に引き返すということになった。

この筆跡は、友人吉村洪一氏に贈られた自筆本『「ひとりして」第4部「海やまのあひだ」』に由来し大正14年に出版の『第1歌集「海やまのあひだ」』の原歌といわれている。碑の高さは2,9m、幅1,6mで花崗岩を使っている。刻まれている歌は、次の通



に波く山  
来ゆまめ  
てたのぐ  
に蟻り  
たあの  
ゆそ穴二  
たべに日  
ふりも人  
命見見  
牟入ず  
し婁り  
ばのつ  
やす磯つ  
すらふ  
なく

## 世界遺産登録5周年・語り部友の会結成10年

平成21年7月7日で熊野古道伊勢路が「紀伊山地の霊場と参詣道」文化的景観と祈りへの道ということで世界遺産登録されて5年が経ち、世界遺産5周年・語り部友の会10周年記念イベントが平成21年7月19日に行われ、記念碑が建立されました。



平成21年7月19日 世界遺産登録5周年記念碑 除幕

### 世界遺産熊野古道伊勢路の思い出

花尻薫

岡本実先生との出会いは、私が金山小学校から熊野市教育委員会社会教育課へ転勤した直後に始まる。その当時熊野市教育委員会には、岡本実・山本梅三郎・清水太郎・島正央・前千雄など今日の熊野市の歴史・文化を築いた大先輩が活躍していた。

熊野市教育委員会へ着任した直後の昭和52年(1977)6月、岡本実先生から「熊野市内にはかつての熊野街道があるが、国道やJRの開通により、人が歩かなくなり見捨てられようとしている。このすばらしい石畳道や峠からの眺めは、私たちの先人が汗で築いた尊い街道で、『蟻の熊野詣』と呼ばれた江戸時代の中頃から後半にかけて三万人もの巡礼が東北方面から歩いた貴重な財産で、熊野三山へ向かう道でもあり、先祖の生活の道でもあった。」と教えられた。「それで市民に呼びかけて熊野古道を守る会を結成してほしい」と頼まれた。文化財には興味があり、保護活動には多少の熱意を持っていたので、市民の有志に呼びかけたが期待したほどの理解は得られなかった。そこで、文化財専門委員会の事務局を担当していた私が委員に呼びかけて「古道を守る会」を結成した。

岡本実先生は熊野市内の古道や人々の生活を詳しく調べておられた。特に波田須の史跡や石畳道、民話などに関しては資料を多く集めておられた。昭和54年になり、三重県が「国際児童年(1979)」を記念した「母子の歴史の散歩道」を「道」として設定したいと私の面識のある担当の部長が直接来られ、波田須へ設定しようということになった。そこで、岡本実先生に相談、中本五郎氏や区長さんなどの有志を訪ね賛同を得た。旧街道や道標・弘法伝説・徐福の宮を包含したすばらしい

「波田須の道」が三重県指定になり、「旧街道を歩こう大会」の横断幕をかかげて、昭和56年(1981)に地域の代表や住民の方々と開道式を行った。このことが弾みとなり昭和60年(1982)に新鹿から二木島への逢神坂や二木島峠を越えた。市民50余人が参加、最年少は8歳、最高齢73歳の女性であった。最初の57年には松本峠、58年には大吹峠と3年連続の古道ウォークであった。「野山を歩く会」と題したが、かつての古道は草が生い茂り、倒木があり、埋もれた石畳道を掘り起こすのは大変であった。多くの住民や木本高校の若い先生方が草刈り機を担いで黙々と整備してくださった。お陰で見事な街道として蘇った。野山を歩く会毎に岡本実先生を講師にお願いした。

